

第 19 小洞天「蓋竹山洞」の現況

土屋昌明

はじめに
蓋竹山洞の現況
まとめ

はじめに

2009 年 9 月 8 日、浙江省臨海市に所在する第 19 小洞天「蓋竹山」の実地調査をした。本稿はその現況と初歩的所見をまとめたものである。

これより先に仙居県の括蒼山洞で実地調査をし、そのあと仙居県から車で約 1 時間、黄岩へ行く途中に蓋竹山を調査した。ここは当初の調査予定にはなかったが、天台山桐柏宮の張高澄道長の紹介で、第 19 小洞山の蓋竹山の調査をすることにした¹。

「蓋竹山洞」は『天地宮府図』に「周廻八十里、名を長耀宝光天と曰ふ。台州黄岩県に在り、仙人商丘子に属して之を治めしむ」とある²。現地では七十二福地の第 2 福地とも言っているが、『天地宮府図』によれば、第 2 福地は「衢州仙都県」に所在するとある。

『真誥』巻 4 の茅中君の言葉に、蓋竹山洞の景観がやや詳しく描かれている³。

〔許邁は〕すでに（地仙として）竹葉山に移った。この山は蓋竹山ともいう。山の東面に二つの隴があって西の方にせり上がり、そこに石井橋がある。橋の上に小道がまっすぐに入っており、そのあたりに六本の叢生した杉の樹がある。樹のあたりから三百歩のところにな小さな奥深い石室があり、この石室の前に流泉水がある。映〔許邁〕は三人と一緒にこの石室の中に住んでいる。今度の辰の年（戊辰、太和三年、三六八）にはきっとしばらく人間界にもどって捧げ物の食事を食べるであろう。しばらく郷里の山の近所にもどらせ、その家の兄弟たちに会わせたくもあるのだ。その時には弟の所在を知ら

1 天台山桐柏宮および張高澄道長については、本誌『洞天福地研究』第 1 号の土屋「第 6 大洞天「赤城山洞」と第 27 小洞天「金庭山洞」の現況」を参照のこと。

2 司馬承禎『天地宮府図』（『雲笈七籤』巻 27、中華書局道教選刊本）「周廻八十里、名曰長耀宝光天、在台州黄岩縣、屬仙人商丘子治之」。

3 京都大学人文科学研究所「六朝道教の研究」研究班「『真誥』訳注稿（一）」『東方学報』京都第六八冊、1996 年、697～698 頁。「今已移在竹葉山中、或名此山爲蓋竹山、山之東面、兩隴西上、其中有石井橋、橋之北小道直入、其間有六叢杉樹、樹之左右三百歩有小石深室、室前有流泉水、映與三人共止其中、此辰年當自甞出還人食饒、亦欲還郷里山之近處、令其家兄弟見之者也、臨時自當令其弟知之所在、乃又寄謝令弟子勸之、若欲至竹葉山索映、亦即得相見、竹葉山東上石橋、橋之北小道甚徑易、勿從南山上山、南道絶險、竹葉山中仙人陳仲林許道居尹林子趙叔道、此四人並以漢末來入此山、叔道已得爲下真人、仲林大試適過、行復去、此是竹葉山中舊仙人也。其王世龍趙道玄傳太初許映、或名遠遊、適來四年耳。」

せ、さらにそのうえ、通知して弟の子に励むようにさせよう。もし竹葉山にやって来て映〔許邁〕を探索したければ、ただちに面会できるであろう。竹葉山の東の山上には石橋があり、橋の北の小道はたいそう通りやすい。南側から山に登らないように。山の南の道はとても険しい。竹葉山中の仙人の陳仲林・許道居・尹林子・趙叔道、これら四人はいずれも漢末にこの山にやって来た。趙叔道はすでに下真人となることができ、陳仲林は大試にやっと合格し、やがて仙去するであろう。これらは竹葉山の古参の仙人たちである。王世竜・趙道玄・傅太初と許映、あるいは遠遊ともいうは、山に来てから四年が経っただけだ。

現地では、期せずしてこの記述を確認することとなった。

蓋竹山洞の現況

まず桐柏宮の張高澄道長の紹介によって臨海市城隍廟を訪れた。打ち合わせの後、城隍廟の趙嗣一道長の手配によって車による案内を得て蓋竹山に向かった。

蓋竹山は、臨海市街から約 15 キロ、本来はそこから徒歩で 2 時間登らなければならず、この道は険しいという。現在、蓋竹山の東側から山道を建設中で、事情に詳しい案内人のおかげで林道を中腹まで車で上がる便宜を得た。『真誥』に言う「南側から山に登らないように。山の南の道はとても険しい」とは、この旧道のことであろう。洞窟の前殿に上がればわかるが、山の南側は足下の見えない断崖であり、その下から上がってくる道は容易でないはずである。

城隍廟の関係者である盧氏から聞いた話によれば、この山は山中に植生する竹に特徴があり、トップの部分に傘状の葉を生やし、そのため蓋竹山とよばれるとのことである。確かに所々にそのような竹が簇生していた。ただし、山上の洞窟の前に竹が蓋のように生えているためだとする説もある。蓋竹山上の道観と洞窟を管理しているのは臨海市城隍廟であるとのことである。

城隍廟の関係者によれば、蓋竹山では仙人の葛仙翁（葛玄）が修道したという。葛玄の作とされる『老子道德経序訣』によれば、葛玄は天台山で徐来勒に靈宝経を授かったことになっており、葛玄・徐来勒・天台山・蓋竹山の関係については、葛玄・徐来勒の伝説の変容を歴史的に検討するべきであろう。

その一方、当地の修道者たちは、葛玄が蓋竹山で修道したということを前提して、蓋竹山において地形的に優れた場所は必ずや葛玄が修道したはずの場所だと考え、そこを福地とみている。たとえば蓋竹山中腹のある場所は、背後の峰から小川が南向きに流れてきて、左右に丘がうねっており、手前にやや広い平地があって、なるほど優れた場所であった。そのような場所は葛玄が修道した場所であるはずだ、というのである。

そのような場所を修道の便宜のために保存しようとする動向がある。その場合、いまは農家の畑になっているが、その使用权を臨海市の城隍廟が購入し、修道者のために道観を建築する予定であるという（GPS: 北緯 28.7522 東経 121.1681）。その場に立つてみると、たしか

4 これは『真誥』巻 11 に「〔葛玄〕初在長山、近入蓋竹、亦能乘虎使鬼、無所不至、但幾於未得受職耳」とあるのなどによったのであろう。



手前が道観建設予定地

に太陽光線や空気の流れ、水の流れ、植生などが優れていることが感じ取れた。

ほかに葛玄がお茶を植えた場所という葛仙翁茶処があるが、とくに遺跡があるわけではない。また、それより上がると北斗壇跡とされる場所がある⁵。そこには基壇とおぼしき土盛りと建築材らしいレンガが確認できるが、考古調査はおこなわれておらず、詳細は不明である。ただ、これらの場所が景観として優れており、穏やかな場所であることは見て取れる。北斗壇とされる基壇からは、北の彼方に岩がむきだしの崖とその下にある蓋竹洞の前殿、そのまえに突き出して建てられた建築物を遠望することができた。

遠望できた建物の手前にもう一つ道観らしき建物があり、洞窟へ向かうのにその内部を通っていくが、特に祭祀をしている風ではなかった。その建物の手前の大木の根本から清い水が湧出する泉があり、その建物は元来は道観であったと思われる。『真誥』で言う六本の杉が残っているとは思われないが、このあたりが「石橋」にあたるのであろう。

蓋竹洞は東の山の本体からせり出た崖の中腹にある。『真誥』に言う「石臼・石几」などは、この崖に見られる奇妙な形の岩を指しているようである。洞窟の上に「天門」とあり、奥は深くない。あるいは人工の洞窟とも思われる。洞内には千手観音風の真新しい神像があるが、その祭祀の詳細は不詳である（許邁を祀っている様子はない）。洞窟の前に突き出る形で丹鳳楼が作っている。その前に二階建ての前殿があり、もとのものは1993年に焼失、現在のものは1997年に建造されたコンクリート製である。しかし、現在のものも当時の施工に問題があり、建築上かなり脆弱な状況にある。

この建物の南側と西側は足下が見えない絶壁であり、この状況は相当に危険である。ここには道士は住持していないが、修道者は宿泊するようである。そこで、2009年から臨海市城隍廟の趙嗣一道長らが中心となって改修資金を集めている。ここからは蓋竹山の頂上を東側にして、

5 『嘉定赤城志』巻19（四庫全書本、臨海宋氏本）に「觀壇各一所。有竹如蓋、故以爲名。抱朴子云、『此山可合神丹。』有仙翁茶園。旧傳葛元植茗於此。又有禮斗壇・石窓・石几・石床・石臼・石硯」とある。

四方の山々を眺めることができ、東南の方角は遙か彼方まで望むことができ、非常に優れた景観である。西南方向の山とのあいだに深い谷がある。

修道者は、樹木が叢生していた道観らしき建物のある泉のあたりから裏手を登り、崖の上から尾根沿いに蓋竹山の頂上付近で修道するという。崖には登るルートがあるが、傾斜が急なため、草木を頼りに両手をついて這って登らなければならず、相当に危険であった。



北斗壇から、崖の下に丹鳳樓



崖の上から東の蓋竹山獅子頂付近

崖の上から見ると、その峰の北側も断崖絶壁となっており、前後の谷を挟んで彼方になだらかな山が続いている。つまり蓋竹洞のある崖（GPS：北緯 28.7541 東経 121.1646）は、東側の山から尾根が舌先のように突き出た形になっているのである。『真誥』が言う「山の東面に二つの隴があって西の方にせり上がり」とは、このような景観を表現したものなのであろう。

現地の案内によれば、民国時期には林誠寿（1911～1949）が道長として住持し、道士が 7 人いた。当時は信徒を集め、毎日のように百人以上が参詣していたほか、慈航真人（観音菩薩）の誕生日（2 月 19 日）・成道日（6 月 19 日）・出家日（9 月 19 日）には千を以て数える参詣者がいたという。その後、政治運動の嵐の中で荒廃し、徐宗達（1926～2007）が 1984 年から住持して復興に努めた。

徐宗達は、浙江黄岩の人。龍門宗第 23 代伝人。1975 年に臨海嶺西堂の程理能道長に師事し、1984 年に蓋竹洞監院、2002 年に臨海市道教協会名誉道長、2007 年に「含笑而去」⁶という。

臨海市に下りてから城隍廟の趙嗣一道長を訪ねた。趙道長は 36 歳、アメリカ滞在の経験があるとのこと。道教は世界平和に貢献できるという信念を持っていることがうかがえた。インタビューに応じてくれたが、蓋竹山洞・洞天そして当該城隍廟の個別的な質問に対しては、当方に十分な事前準備がなかったためもあって、具体的な回答を得ることは残念ながらできなかった。

まとめ

蓋竹山洞は浙江省臨海市の南にある蓋竹山の山上にあり、現地の景観はよく保存されていて、『真誥』巻 4 の記載と通じる。逆に言えば、『真誥』で蓋竹山について述べる茅中君の言葉は、蓋竹山の事実に基づいており、この言葉を述べた者は蓋竹山洞に実際に行った経験があるとみてよいと思われる。

6 現地に立つ「徐宗達監院事跡碑」（2008 年 6 月臨海市道教協会立）による。

蓋竹山洞の洞窟は南に開けた崖の中腹にあり、現地では楊輿洞とも称されている。南側には蓋竹山より高くて広大な山地が続いている。蓋竹山の東側は盛り上がって峰となっており、その左手に突き出た岩がある。現在、その岩の近辺も修道地点になっているという。洞窟のある崖は、西にせり出しており、その西側から南側、そして北側も深い谷になっている。谷底には溪流が流れているらしいが、洞窟からは眺められない。谷はこの突き出た崖を迂回するように曲がって南へ進み、東南の方角に開けているが、その先の彼方にも山が続いている。北斗の祭祀をしたと思われる北斗壇（礼北壇とも）の跡地とおぼしき遺跡が洞窟を臨む南の山道にあるが、考古調査・文献との対照はまだされていない。



蓋竹山洞窟前殿から南の景観

謝辞

多くの便宜をはかって下さった、臨海市城隍廟の趙嗣一道長および関係の方々に感謝の意を表する。